

研究ノート

Sure-thing Principle と貨幣の必然性

—対象に共通な論理構造の一例—

瀬戸 廣 明

Savage が個人確率論を展開する上で重要な柱としている Sure-thing Principle が『資本論』において貨幣の必然性が論じられるのと全く同じ論理展開で導きだされるのに気づいたのは1年前であったが、木村等・廣瀬文子「個人確率」によりこの気持は確信に転化したので、あえて卑見を披露することとした。しかし本稿は論理展開が同じであることを指摘するにとどまり、貨幣が『資本論』に於て占めると同じ位置を sure-thing Principle が Foundation of Statistics に占めているかについては論じていない。また冗長に流れるのを避けるため、『資本論』と Foundation of Statistics (1954) の両者を読んだ人を対象とする体裁をとっている。しかしこれは重要なことではない。『資本論』第1巻第1篇第1章第3節価値形態または交換価値と同第2章交換過程及び上の木村・廣瀬論文を読むだけでよいのである。

商品は価値であり使用価値である。諸商品は自らの価値を他の商品、使用価値としての商品で表わす。この価値の表現形態すなわち価値形態は最も簡単なそれから燦爛たる貨幣形態にまでその発展過程をたどることができる。

簡単な・単独な・または偶然的な・価値形態

「X 商品 A = Y 商品 B すなわち、X 量の商品 A は Y 量の商品 B に値する。」⁽¹⁾

「単独な価値形態は、おのずから、一より完全な形態に移行する。単独な価値形態に媒介されて、一商品 A の価値は、なるほど、他の種類のただ一つの商品のみで表現さ

(1) K. マルクス『資本論』第1巻第1篇第1章3節, 134ページ (長谷部文雄訳青木書店版)。原書, 53ページ。

れる。しかし、この第二の商品がどんな種類のものであるかということは、一上衣であるか、鉄であるか、小麦などであるかということは全くどうでもよいことである。だから、商品Aが他のあれやこれやの商品種類と価値関係を結ぶのに応じて、一個同一の商品の種々なる簡単な価値諸表現が生ずる。商品Aの可能な価値諸表現の数は、商品Aと異なる諸商品種類の数によって制限されているだけである。だから、商品Aの単独な価値表現は、商品Aの種々なる簡単な価値諸表現のたえず延長されうる系列に転化する。⁽²⁾」

—商品A例えば 20 エルレの亜麻布は自らを自分以外のあらゆるもの— 1 枚の上衣、10 封度の茶 等々—を等価形態においてはじめて自らの価値を完全に表現することができる。—全体的な・または開展された・価値形態

全体的な・または 開展された 価値形態の欠陥 「第一に、商品の相対的な価値表現は、その表示系列がけっして終結しないがゆえに未完成である。一の価値方程式がよって以て他の価値方程式と結びつく鎖は、一の新たな価値表現の材料を提供する新たに登場する各商品種類によって、いつまでも引きつづき延長されうるものである。第二に、この鎖は、ばらばらの種々の種類の価値諸表現の雑然たる寄木細工をなす。最後に、どの商品の相対的価値もこの開展された形態で表現される—そうされざるをえないのだが—とすれば、各商品の相対的価値形態は、他の各商品の相対的価値形態とは異なる、価値諸表現の無限の—系列である。⁽³⁾」

「我々はこれまで、行動の間に選好による順応をつけるかと考えて来た。しかし、これは状態としては、すべての起りうる場合全体、すなわち、 S 全体について考えて比較ができるとしているのであって⁽⁴⁾」

一部すなわち、 S の部分集合 B 別の言葉をもちいれば、事象 B が起るときのみ比較については考えていないのである。ここではじめて、事象 B が起ったときという制限のついた場合の行動の比較が問題となる。この制限つきの比較を、制限なしの S 全体での比較によって定義しなければならないわけである。⁽⁵⁾」

(2) 同上、156ページ。原書67ページ。

(3) 同上、159ページ。原書69ページ。

(4) 木村 等・廣瀨文子「個人確率」、『香川大学経済論叢』第44巻第4・5・6号、1972年、133ページ。

(5) 木村・廣瀨同上、133ページ。

20 エルレの亜麻布 = 1 枚の上衣

20 エルレの亜麻布 = 10 封度の茶 等々

「これらの方程式はそれぞれ、—

1 枚の上衣 = 20 エルレの亜麻布

10 封度の茶 = 20 エルレの亜麻布 等々

というように、同一の方程式を逆の連関でも含んでいる。」⁽⁶⁾—一般的な価値形態へ発展

「 B が起ったときという制限つきの比較においては、 B が起らない場合は問題になっていない。したがって、 B 以外の状態についての f と g の値に依存することなく比較がされなければならない。そこで、 B 以外の状態について、すなわち、すべての $se \sim B$ については、 $f(s) = g(s)$ として考えてよいであろう。したがって、 B 以外の状態については、 f と g とが一致するように修正したとき、なお S 全体についてなされる行動の比較において、 $f \leq g$ とされるときに、 B の起ることが知られたとき、 g が f より選好されるという定義する。このことを形式的には、

$$f \leq g \text{ given } B$$

とあらわすことにする。」⁽⁷⁾

「時間的な関連のある決定問題、すなわち、事象 B が起るかどうかを観察したのちに f と g いずれをとるかを決定する、あるいは、事象 B が現に起ったことを知ったとき f と g いずれをとるかを決定する問題を、時間関係ぬきの問題としてとりあつかうのが $\leq \text{given } B$ の考えである。」⁽⁸⁾

「…諸商品は、みずからを諸使用価値として実現しうる前に、みずからを諸価値として実現しなければならぬのである。他方において諸商品は、みずからを諸価値として実現しうる前に諸使用価値たる実を示さねばならぬ。」⁽⁹⁾ (交換過程論)

これは矛盾である。この解決として貨幣商品が現われる。人は事象 B が起るかどうかを観測したのちに f と g いずれをとるかを決定することができる。しかしこの決定を事象

(6) K. マルクス 同上, 160 ページ。原書70ページ。

(7) 木村・廣瀬 同上, 133 ページ。

(8) 木村・廣瀬 同上, 136 ページ。

このパラグラフは最後にまわすこともできる。何故ならこのパラグラフがなくてもつぎのパラグラフへの展開には支障はないからである。この最後にまわしたのが『資本論』の第1巻第1篇第2章の「交換過程」にあたる。本文のような排列は『経済学批判』にあたる。

(9) K. マルクス 同上, 163 ページ。原書91ページ。

が生起する前にしたいのである。これは矛盾である。この矛盾の解決として \leq given B が principle とされる⁽¹⁰⁾。

「ここで上に述べた関係（これについては本稿では引用されていない筆者） \leq given B をもちいて sure-thing principle を整理しておく。2つの行動 f, g から、つぎのような4つの行動 $h_{00}, h_{01}, h_{10}, h_{11}$ をつくる。

h_{00} は B において f に、 $\sim B$ において f に一致する。

h_{01} は B において f に、 $\sim B$ において g に一致する。

h_{10} は B において g に、 $\sim B$ において f に一致する。

h_{11} は B において g に、 $\sim B$ において g に一致する。

いま

$$f \leq g \text{ given } B$$

がなりたつならば、

$$h_{00} \leq h_{10}, \quad h_{01} \leq h_{11}$$

がなりたつ。また、

$$f \leq g \text{ given } \sim B$$

がなりたつならば

$$h_{00} \leq h_{01}, \quad h_{10} \leq h_{11}$$

がなりたつ。したがって、

$$f \leq g \text{ given } B, \quad f \leq g \text{ given } \sim B$$

がともになりたつならば、

$$h_{00} \leq h_{10} \leq h_{11}$$

$$h_{00} \leq h_{01} \leq h_{11}$$

がなりたつ。したがって

$$h_{00} \leq h_{11}$$

すなわち、

$$f \leq g$$

(10) 木村・廣瀬 同上, 136-37ページ。

がなりたつ。このようにして、sure-thing principle がなりたつことがわかる。⁽¹¹⁾

「一般的な等価形態は価値一般の形態である。だからそれはどの商品にでも帰属する。他方において、一商品が一般的な等価形態にあるのは、ただ、その商品が他のすべての商品によって等価として排除されるからであり、またその限りにおいてである。そして、この排除が窮極的に一独自の商品種類に限定されるその瞬間から、はじめて、商品世界の統一的な相対的価値形態が、客観的固定性と一般的・社会的妥当性とを獲得したのである。

さて、その自然的形態に等価形態が社会的に癒着している独自の商品種類は貨幣商品となる」⁽¹²⁾（貨幣形態）。

「B が実際に起りうるものであるという条件のもとで、B が起ることを知ったとき、f より g を真に選好し、 $\sim B$ が起ることを知ったとき、f より g を選好するならば、人は⁽¹³⁾ f より g を真に選好するであろう。」

(11) 木村・廣瀬 同上 133 ページ。